

2004春日井市民第九演奏会

とき 2004.12.5 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催 春日井市、(財)かすが市民文化財団、春日井市教育委員会、2004春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中日新聞社

ごあいさつ



春日井市長 鵜飼 一郎

「2004 春日井市民第九演奏会」によるこそお越しくございました。今年も残すところ後一ヶ月となりました。皆様方それぞれが多くの思い出を作られたことと思います。今年もまた年末のひとときを、皆様とともに「第九」の調べを聴きながら過ごせることを、大変うれしく思っております。

平成5年に市制50周年を記念して始めましたこの演奏会も、今年で12回を数え、師走を彩るイベントとして定着してまいりました。これもひとえに、春日井第九合唱団と春日井市交響楽団の皆さんを始め、関係の皆様のご多大なるご尽力の賜ものと心から感謝申し上げます。

今回は、昨年、素晴らしい演奏をお聴かせくださったヨッヘム・ホッホシュテンバッハ氏を再び指揮者にお迎えするとともに、ソリストには国際的に活躍されているロビン・アダムズ氏を始め実力派の方々をお迎えしております。その多彩で優れた才能によってより一層、充実した「春日井の第九」を聴かせてくださるものと大いに期待しております。

それでは、この一年を振り返り、新たなる年に思いを馳せながら、「第九」の調べをどうぞゆっくりお楽しみください。



2004春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学学監 三浦 昌夫

みなさまには、おそろいで「春日井市民第九演奏会」においでいただきありがとうございます。毎年、12月に一年の幸せを感謝して、来年はすべての人にとって良い年でありますようにと願いながら、この人類愛を讃えた「第九」を歌ってまいりました。

昨年の演奏は「格調が高く、清潔感があり、ベートーヴェンの音楽の神髄に迫っている」と大変好評でしたので、指揮者ヨッヘム・ホッホシュテンバッハさんを再度お招きしました。さらに、いま話題のバリトン歌手ロビン・アダムズさんもソリストにお招きしました。百々あずさんと野上貴子さんと川野名康夫さんの三人の若いソリストのみなさまの活躍も期待できます。オーケストラはいつもの市民オケ「春日井市交響楽団」ですが、加藤完二先生や竹内雅一先生や神野玲子先生方のご指導をえて入念な練習を重ねてきました。合唱団には、中部大学の混声合唱団も加わります。ボン生まれのドイツ人小黑ビルギッタ先生(中部大学)からドイツ語の発音を2回にわたって学びました。吉川朗先生の楽しく厳しいご指導もあって、さらに高い境地を目指します。

この勢いをかって、来週の土曜日には愛知芸術劇場コンサート・ホールで4楽章を演奏します。本日お集まりの春日井市民のみなさまと同じように、名古屋のみなさまにも、「春日井市民の第九」をお楽しみいただけるものと存じます。

では、最後の全員合唱のアンコールまで、ごゆっくりお聴き下さい。

プログラム

Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN (1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125 「合唱つき」 Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

第1楽章 アレグロ マ ノン トロppo, ウン ポコ マエストーソ
1mov. Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章 モルト ヴィヴァーチェ
2mov. Molto vivace

第3楽章 アダージョ モルト エ カンタービレ
3mov. Adagio molt e cantabile

第4楽章 フィナーレ, プレスト-アレグロ アッサイ-レシタティーヴォ-アレグロ アッサイ
4mov. Finale, Presto - Allegro assai - Rezitativo - Allegro assai

指揮者

Conductor

ヨッヘム・ホッホシュテンバッハ

Jochem Hochstenbach



ソプラノ Soprano

百々あずさ

Dodo, Azusa

アルト Alto

野上 貴子

Nogami, Takako

テノール Tenor

川野名康夫

Kawanona, Yasuo

バス Bass

ロビン・アダムズ

Robin, Adams



Music director

音楽監督 都築正道

Tsudzuki, Masamichi

Sub conductor

合奏指導 加藤完二

Katoh, Kanji

Chorus conductor

合唱指導 吉川 朗

Yoshikawa, Akira



管弦楽 春日井市交響楽団

KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA



合唱 春日井第九合唱団

KASUGAI CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介



指揮者 ヨッヘム・ホッホシュテンバッハ

指揮者でピアニスト。1970年オランダのティバークに生まれました。1984年からユトレヒトの音楽院でピアノを学び多くの賞を得て卒業。1992年スペインやドイツやチェコのマスタークラスで学ぶ。1994年からウィーンの学生オーケストラの指揮をする。オーストリア、イタリア、日本、フィンランド、エストニア、ハンガリーなどで演奏会を開く。1997年ウィーン音楽院をディプロマを得て修了。1997年よりリンツの州立歌劇場でコレペティートルを務める。1999年に同劇場の音楽監督に昇格。以来、《フィガロの結婚》など120の歌劇作品を上演。

ソプラノ 百々あずさ

愛知県生まれ。私立滝高等学校普通科を経て、国立音楽大学音楽学部声楽学科入学。同大学卒業後、98年度イタリア政府給費留学生として、渡伊、トリノのジュゼッペ・ヴェルディ国立音楽院声楽学科卒業。国内では、白鳥センチュリーホールにて、ベートーベンの「第九」（松尾葉子指揮、セントラル愛知交響楽団）にソリストとしてデビュー、イタリア・ドイツでは、オペラ「ダイドとイニエース」（パーセル作曲）、「ドン・ジョヴァンニ」（モーツァルト作曲）、「ジャンニ・スキッキ」、「ラ・ボエーム」（ブッチーニ作曲）等に出演。また、ヴィヴァルディの「グローリア」（オルヴィエート国際音楽祭）、フォーレのレクイエム（豊田市合唱団）のソリストを務めたりと、宗教音楽にも活動的。第51回全日本学生音楽コンクール名古屋大会声楽部門大学・一般の部第1位、第9回リカルド・ザンドナイ国際音楽コンクール特別賞受賞、第21回サンタ・マルゲリータ市国際声楽コンクール第2位、第2回カルロス・ゴメス国際オペラコンクール入選。現在、ジェノヴァ在住。



アルト 野上 貴子

大阪音楽大学音楽学部声楽学科卒業。宝塚ベガコンクール声楽部門第2位。摂津音楽祭銅賞。飯塚新人音楽コンクール声楽部門第3位。オペラ「ラ・ジョコンダ」チェーカ、「こうもり」オルロフスキーで出演。「99KACC（神戸芸術文化会議）コンサート」「KOBEフレッシュコンサート」等に出演。また、第九、モーツァルト、プーランク、サン＝サーンス、ベルゴレージのミサ曲のソリストを務める等、各種演奏会に出演する他、多数のオペラ公演にも出演。故岡岡隆正、井上敬典、安藝榮子の各氏に師事。現在、神戸市混声合唱団、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス合唱団、各団所属。



テノール 川野名康夫

1972年東京生まれ。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。卒業後、イタリアジェノヴァのニコロ・パガニーニ国立音楽院にて学ぶ。ジェノバ（イタリア）・スイスにて、ロッシニ作曲『Petite Messe Solennelle（荘厳ミサ曲）』のテノールソロとして、出演。南イタリア・フォッジャのジョルダノー・フェスティバルにて、『Andrea Chenier』に出演。サンタ・マルゲリータサマー・オペラ・フェスティバルの『愛の妙薬』（ドニゼッティ作曲）で、主人公ネモリーノ役で出演。2003年11月Savona, Imperia, La Speziaの各劇場で『蝶々夫人』のGoroを歌い、その歌唱力・演技力で絶賛を受け、2004年にはSavonaのシーズンで『椿姫』のアルフレッドを歌うことになっている。その他、イタリアにおいて『蝶々夫人』『トスカ』などのオペラ、各種コンサートに出演し、好評を博す。櫻井直樹氏、勝部太氏、故足田生次郎氏、ジャンニ・ライモンディ氏、カルメン・ヴィラルタ女史、ジャンフランコ・パステネ氏に師事。フレーベル少年合唱団指導者。現在、イタリア在住。

サマー・オペラ・フェスティバルの『愛の妙薬』（ドニゼッティ作曲）で、主人公ネモリーノ役で出演。2003年11月Savona, Imperia, La Speziaの各劇場で『蝶々夫人』のGoroを歌い、その歌唱力・演技力で絶賛を受け、2004年にはSavonaのシーズンで『椿姫』のアルフレッドを歌うことになっている。その他、イタリアにおいて『蝶々夫人』『トスカ』などのオペラ、各種コンサートに出演し、好評を博す。櫻井直樹氏、勝部太氏、故足田生次郎氏、ジャンニ・ライモンディ氏、カルメン・ヴィラルタ女史、ジャンフランコ・パステネ氏に師事。フレーベル少年合唱団指導者。現在、イタリア在住。

バス ロビン・アダムズ

イギリス生まれのバリトン歌手。王立スコットランド音楽演劇大学で学ぶ。多くの奨学金と賞を得て卒業。オペラ歌手としてのアダムズは、パロック・オペラから現代オペラまで幅広いレパートリーをもっています。大学時代の1993年にミヨーの「オルフェウスの不幸」のオルフェウスを、1994年にギルバート＝サリヴァンの喜歌劇「戦艦ビナフォア」の艦長を歌うなど、すでに高い評価を受けていた。1995年の日本ツアーでも、能の「隅田川」を題材としたベンジャミン・ブリティンの歌劇「カーリユーリヴァー」の渡し守を歌い好評であった。これまでに、多くの歌劇の主演を歌い、現在、国際的に最も活躍中のバリトンの一人である。また、コンサートでも、「メサイア」「マタイ受難曲」（バッハ）「カルミナ・ブラーナ」「ドイツ・レクイエム」（ブラームス）「嘆きの歌」（マラー）などを歌う。



音楽監督 都築 正道

1940年名古屋生まれ。名古屋大学文学部美学卒。関西学院大学院博士課程修了。「ワーグナー研究」で文学博士。現在、中部大学教授。オペラを中心に「舞台芸術論」を講義。春日井市交響楽団音楽監督。春日井市民第九演奏会音楽監督。愛環音楽連盟理事長。名古屋ナポリ協会会長。「桑名で歌う日本の第九」「NYの指揮者とソリストによる春日井第九」「愛環千人の第九」「(同)ガラ・コンサート」「中部大学キャンパス・コンサート」などを企画。朝日新聞音楽評担当。愛知県芸術劇場の「オペラ・トーク」「ハイビジョン・オペラ・シアター」をはじめ、講演会やTVや雑誌でオペラを解説。「名古屋オペラ・サロン」主宰して毎月「オペラ講座」を開催。NHK名古屋文化センター講師。オペラ関係の著書に『楽劇：音と言葉の美学』（音楽之友社）『あくびなしの音楽講座：トスカ』（同）がある。日本ベンクラブ会員。



コンサートマスター 練習指揮 加藤 完二

ヴァイオリンを尾島綾子・東儀幸各氏に師事。在学中より指揮を学び、卒業後関西二期会等で朝比奈隆氏の副指揮を務めた。大阪音楽大学でのオペラ指揮を皮切りに、各地でオーケストラやオペラを指揮。特にアマチュアオーケストラのトレーニングは好評。ルーマニアの「第2回ディヌ・ニクレスク国際指揮者コンクール」入賞及び審査員特別賞受賞。6年後同国でオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」を客演指揮し、海外でも評判を得る。伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団監督。クラブ室内管弦楽団主宰。



合唱指揮 吉川 朗

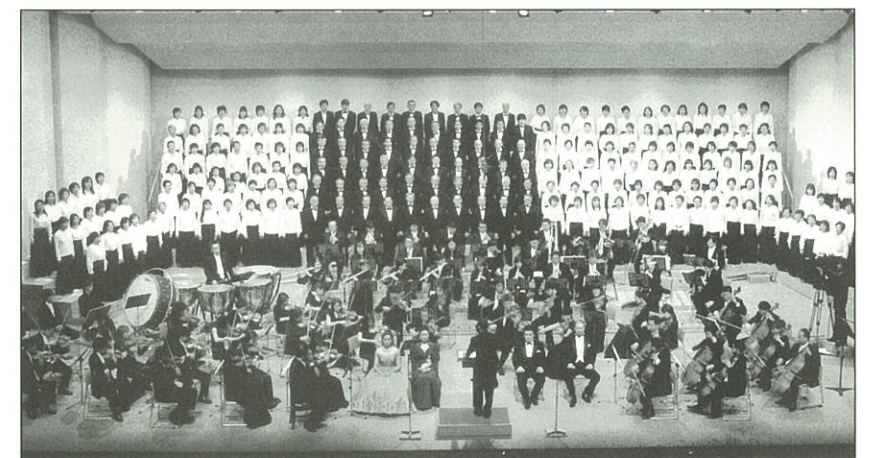
愛知教育大学音楽科卒業。同大学院（作曲）修了。第九指導は1987年の半田第九に始まり、ナゴヤシティ管弦楽団（現セントラル交響楽団）、一宮第九を歌う会、小牧第九合唱団など。NHKナゴヤニューサウンズオーケストラ常任指揮者。

ピアノ伴奏（合唱団） 竹内 理恵 松永祐未子



オーケストラ 春日井市交響楽団

市民オケである春日井市交響楽団は、「第九の演奏会を春日井でも開きたい」という市民の長年の希望から生まれました。「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年（平成2年）11月に創立されました。愛称「カポ」（KAPO）は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo 頭・先頭に立つ者）の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって、最大の喜びは、一人でも多くのおみなさまに演奏会においでいただき、クラシック音楽を好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。「春日井音楽文化の窓」として、優れた演奏家を定演に招くことも市民オケの使命と考えています。今年はウーンフィルのコンサートマスター、ライナー・キュッヒルさんを、来年はヴァイオリニストの前橋汀子さんにおねがいました。これからも、さらに、市民のおみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。（団長・花村浩克）



合唱 春日井第九合唱団

平成5年12月の春日井市制50周年は、市民の手によるベートーヴェンの「第九演奏会」の春日井初演によって盛大に祝われました。この演奏会を記念して作られたのが、「春日井第九合唱団」です。以後、毎年12月には、新しく募集した市民も加わって、220名を越すメンバーが常に新鮮なベートーヴェンの「第九交響曲」を歌い継いできています。創立以来、ベテランの吉川朗先生をはじめ、多くの優れた音楽家のご指導で、技術的にも、音楽的にも、完成度の高い「第九」演奏を心がけています。平成7年からは、年末の「第九」の本練習に入る前に、特別練習として数々の合唱作品に挑戦しています。本年6月19日（土）には、文化フォーラム春日井の交流アトリウムにおいて「ベートーヴェンはランチもお好き？」の演奏会に、日本のうた「ふるさとの四季」で特別出演を致しました。また愛環音楽連盟にも加入して2005年愛知万博には「愛・地球の環音楽祭」に出演する事になりました。今年第12回になる「第九」はドイツのヨッヘム・ホッホシュテンバッハさんの指揮で、さらに美しいベルカントな演奏が出来るものと張り切っています。ご期待下さい。（団長・山田伊素子）

この世で見つけた幸せ

ー ベートーヴェンからのメッセージ ー

精神史としての音楽史 ベートーヴェンは生涯に10曲の交響曲を書きました。1から9までの番号のついた「九つの交響曲」と「戦争交響曲」（1813）です。自動合奏用の機械のために書かれた「戦争交響曲：ウエリントンの勝利またはヴィットリアの戦い」は二部からなるわずか14分の作品なのでこれは交響曲に加えないことにして、9曲すべての交響曲を聴くと最後の交響曲がいかに特別なものであるかが良く分かります。逆に、ベートーヴェンの「第九交響曲」を十二分に楽しみ理解しようとするならば、一度は交響曲を全部聴いておく必要があります。いえ、それはみなさまが思いになるほど、面倒でも、退屈でも、教条的でも、形式的でもありません。そこにはヨーロッパの悠久な歴史が感じられるだけでなく、いかにベートーヴェンが音楽で思考したかが良く分かります。次から次へと交響曲を初演順に聴いていくと、偉大な芸術家がなした「精神史としての音楽史」が見事に展開されていく現場に立ち合う興奮を禁じ得ないからです。注目すべきは、「第八交響曲」の第3楽章です。皮肉な スケルツォを避けて、「第一交響曲」以来久し振りのメヌエットに戻っています。この作品でもって、ベートーヴェンの全交響曲は、異質の第9番を前にして、見事に円環を閉じるのでした。

マンモス交響曲 また、9曲をより楽しくまとめて聴く秘訣は、これを一つの雄大な「一つの交響曲」として交響曲の順番を入れ替えて聴くことです。すなわち、全体を四楽章に分けます。交響曲の「第一番」と「第二番」は若々しいアレグロの第一楽章です。「第三番」と「第六番」はゆっくりした第二楽章です。「第四番」と「第七番」はスケルツォの第三楽章で、激しい「第五番」とメッセージ性の高い「第九番」は終楽章です。え？「第八番がない」って？ ええ、「第八番」はアンコールにとっておきましょう。

遅れてきた貴年 ベートーヴェン（1770-1827）は、ヘーゲルと同じ年に生まれ、ナポレオンより一歳年下でした。彼ら三人はフランス革命に遅れて来た青年たちでしたが、各々の生き方で革命後の厳しい時代を使命感をもって切り拓いていったのも彼らでした。特にベートーヴェンは、フランス革命の年（1789年19歳）にボン大学の聴講生になり、講壇から熱っぽく説く革命派の教授たちの革命思想に鼓舞された若者の一人でありました。22歳のとき、数年の留学のつもりでやって来たウィーンでしたが、ボンも革命軍の侵入でパトロンの選帝侯マキシミリアン・フランツが逃げ出したので、故郷へ帰ることもできないまま幸か不幸か音楽の都ウィーンに放り出されてしまいました。それから8年、見事に成長した30歳の作曲家ベートーヴェンが、満を持して放ったのが「交響曲第一番」でした。「ベートーヴェンは新しい聴衆を作曲した」と言われるように、恐れを知らぬ傲慢

な若者は、「聴衆のための音楽ではなく、音楽のための聴衆だ」と思っていたようです。伝統への革命が既にしてこの交響曲にあります。

聖なる約束 「交響曲第二番」が完成されたのは1802年（32歳）とされています。その年は、「ジュリエッタ・グイチアルディとの悲恋」に青春を捧げた年であり、あらゆる治療の果てに「耳の疾病の不治を覚悟」した年であり、あの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれた年でもあります。ベートーヴェンが人生において最も悩み苦しみ、自殺も考えた時でありました。彼は常に挫けません。彼は弟のコールに宛てて一通の手紙を書きます。これが「ハイリゲンシュタットの遺書」（Heiligenstadt Testament）と呼ばれるものです。彼の死後偶然発見されたこの「出されなかった手紙」は弟たちへの遺言状といった体裁を取っていますが、決して死や自殺を前提とした「 testament」（遺書）ではありません。そこには、「旧約聖書」（Altes Testament）や「新約聖書（Neues Testament）の「testament」の持つもう一つの意味、すなわち、彼が神にむかってなした「聖なる約束」であったのです。彼は、「不幸にはではなく幸福になるう」と神に誓ったのです。そのtestamentの音楽化が「交響曲第二番」です。これからのち、彼は自分を見舞った過酷な事件に対して不屈の闘志を駆り立てていくのでした。

真の英雄 或る日、友人のクッフナーがベートーヴェンにたずねました。「あなたの交響曲のなかでどれが一番好きですか」「『エロイカ』だよ」「私は『五番』かと思っていましたが…」「違う、全く違う。『エロイカ』、『エロイカ』だよ」とベートーヴェンは答えました。「英雄交響曲」は、音楽史における奇跡です。従来 of 古典交響曲とは質も質も量も異なる全くの前衛音楽であったことは事実で、初演のときの聴衆の激した反応からもそれがうかがえます。なぜ、ベートーヴェンは、保守的なウィーンの人々を残念がらせるような前衛音楽を貴いたのでしょか。それに答えるには、ただ一つのことについて語れば充分でしょう。それはベートーヴェン自身がこの曲について書いた「英雄」というタイトルの真の意味についてです。彼は、この曲をナポレオンを念頭において書いたものの、ナポレオンが突然皇帝になったので大いに失望しました。ナポレオンを、人領の英雄、即ち、人民のための自由の砦となる偉大な人物と見なしていたのですが、反人民性を本質とする皇帝ナポレオンなど彼にとってはもう権力欲に満ちた俗物にすぎませんでした。彼の「英雄交響曲」は、それ以後、実在した歴史上の英雄たちとは全く違った、理念上の英雄たち、すなわち、理想主義の実現に務める未来の英雄たちに捧げる賛歌となったのです。終楽章の長い変奏曲の主題を彼の「プロメテウスの

創造物」から借用したことがこれを象徴的に証明しています。神につかえる巨人でありながら人間を愛し、その人間に神から盗んだ火を与えるプロメテウスこそ理想の英雄であると主張しているのです。

パロディとカタルシス 「第四交響曲」は、「英雄交響曲」で極めて大胆な作曲上の冒険をしたベートーヴェンが、もう一度調子を整えるために、交響曲の原点であるハイドンの基本的なソナタ形式に戻った「パロディ交響曲」でした。「英雄」のあと「第五番」と「田園」を完成することができたのも、この第4番の正統的な書法に帰ることに寄る「フォームの調整」が功を奏したからでした。この交響曲は「英雄」のカタルシス版であり、むろん、退屈からはほど違い、機知とパロディに満ちあふれた傑作です。その破格のリズムは、伝統的なフィナーレをすべて流し去ってしまう激しさです。

双子の兄弟 同時に作られ同時に初演された双子の「交響曲第五番」と「第六番」は、すべての点で相異なり、すべての点で相似通っています。「相違点」は、交響曲は「絶対音楽」か「標題音楽」か、音楽構造は「主題労作（thematische Arbeit）」か「美しいリートの主題」か、主題展開は「循環形式（前楽章の回帰）」か「物語的展開」か、主題音型は「各楽章を統一するオクターブ音型」か「多様な動機の組合せ」か、楽章数は「4楽章」か「多楽章」か、スケルツォは「ABA」か「ABABA」か、オーケストレーションは「精神的に激しい響き」か「自然でアコースティッシュな響き」かーなどなどが上げられましょう。「共通点」は、楽器編成で「新楽器の採用」「ソロ演奏の多用」「マニフェストの採用：苦しみを通じて歓喜へ・自然と人生」「アーティキュレーションの活用：スフォルツァンドの多様・50小節におよぶ長大なクレッシェンド」などなどです。しかし、共通点のすべてが相違点を強調するためのものです。ここにもベートーヴェンの逆説があります。

作曲家のボタン 「あらゆるボタンを外して書いた」と作曲者自身がいつているように、「交響曲第七番」はその屈託のないおらかな古典的晴朗さが何よりの魅力です。また、「酔ったときに作った」といわれるほどディオニソス的な狂騒感が全曲を支配していて、ベートーヴェンには珍しい天衣無縫な音楽となっています。この交響曲が作曲された1813年といえば、ナポレオンの侵略から解放された国々や諸都市が戦勝に湧いた年でした。ウィーンは街をあげて戦没兵士のための大慈善音楽会を催しました。ベートーヴェンの総指揮、ウィーンの有名音楽家総出演によるそれは盛大なものでした。そこで演奏されたのがこの「第七番」と「戦争交響曲ウエリントンの勝利」（作品91）でした。この両曲とも市民の熱狂的な歓迎をうけました。その人気は翌年までつづき、新たに「交響曲第八番」も書き下ろされて演奏会は連続5回の多きを数えたのでした。1814年のウィーン会議では、ベートーヴェンは国際的な名士として世俗的な名声を一身に浴び、彼の生涯における最も

時流に乗った時でありました。それが、苦悩を売り物にしていると私たちが考えがちのベートーヴェンにとって、悪くない環境であったことをいつも思い起こすことが必要です。

神々の火花 シラーは「歓喜よ！ 美しき神々の火花よ！」と歌っています。すなわち、熱い炎が硬い鉄どうしを熔接するように、美しい神々の火花である「歓喜」は私たちの多様で種々様々な心を溶かして一つにすることができのです。「時の流れによって厳しく引離されたもの」を一つに結びつけるのは、神の御業である「歓喜」です。「歓喜」は「共通体験から生まれる感動」のことだといっていいでしょう。

トルコ行進曲 前半のクライマックスのあと、ピッコロと大太鼓とシンバとにトライアングルが加わって奇妙な行進曲を奏でます。この騒然とした異国風の行進曲は、明らかにトルコの軍楽隊を模したものです。テナーのソロに先導されて男声合唱が勝利の歌を歌います。このメロディも巧みにアレンジされた「喜びの歌」です。トルコ人で代表される異教徒たちも、宗教を越えて人類愛の歌に和しているのです。

苦悩を通じて歓喜へ テナー・ソロと男声合唱による行進曲が終わったところから、軽快な行進曲の気分を受けついでオーケストラだけによる後奏（110小節）が始まります。テンポも崩さず、エネルギー維持したままで次第に苦く苦しい音楽へと変わっていきます。それはまるで、私たちをこの快樂の俗世界から聖なる神々の国へ連れ出さんとするような激しい音楽です。この苦悩の旅の果てに、突然オーケストラがクレッシェンドすると、最強音の大合唱による「喜びの歌」湧き起こります。それも長調で、意外に8分の6拍子という底抜けに明るい喜びの世界が現われるのです。「喜びの歌」と「抱擁の主題」による二重フーガです。

音楽の叡智 二重フーガの二つの主題は各々同時に展開していき二重螺旋となって複雑な二重螺旋の世界を生み出していきます。ベートーヴェンはこの複雑な形式の音楽によって、別々の内容を持った二つの詩句「ようこそ百万人の人よ！」と「歓喜よ！」を象徴的に結びつけるのに成功しています。かくて「万人による歓喜の歌」というベートーヴェンの理想がここ to 実現するのです。これは、精神的な地平でのみ可能と思われる、極めて形而上的な現象です。同時代の哲学者ヘーゲルでも羨むほどの見事さであると申せましょう。これは音楽の叡智の哲学に対する勝利を物語るもです。ある人が現代作曲家のシェーンベルクに尋ねましたー「なぜベートーヴェンは、声楽入りの第九交響曲を乱雑だといわれながらも書きつづけたのですか」。彼は言いましたー「答は一つしか知らない。彼には言わねばならぬことがあったからだ」。正にその通りで。彼には言わなければならないことがあったのです。（都築正道）

'An die Freude' 対訳

内藤克彦 訳

An die Freude

喜びに

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
5 Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

喜びよ、美しい神々の火花よ、
至福の園の娘よ、
われらは炎に酔いしれて、
天上のものよ、きみの聖所に歩み入る。
きみの魔力は
流俗の厳しく分離したものを、再び結び合わせ、
きみのやさしい翼の休むところ、
すべての人が兄弟となる。

Chor
Seid umschlungen, Millionen!
10 Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

合唱
抱き合え、百千万の人々よ!
このくちづけを全世界に!
兄弟たちよ—あの星空の上には
一人の慈父が住み給うに違いないのだ。

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
15 Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja — wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
20 Weinend sich aus diesem Bund!

一人の友の友となる
大きな幸に恵まれた者、
やさしい女性を勝ち得た者は、
声を合わせて歓呼せよ!
そうだ—ただ一つの魂をでも
この地上で自分のものと呼べる者は!
それをなし得なかった者は、
泣きながらこのまどいから消え去るがいい!

Chor
Was den großen Ring bewohnt,
Huldige der Sympathie!
Zu den Sternen leitet sie,
Wo der Unbekannte thronet.

合唱
この大地球に住む者は、
共感を信奉せよ!
共感が、われらを星々へ、
あの未知なる存在の玉座へ導いてゆくのだ。

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
25 Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

喜びを、万物は
自然の乳房から飲み、
善きものも悪きものも、みな、喜びの
ばらの道を追いかけてゆく。
喜びは、くちづけとぶどう酒と、
死の試練を経た友をわれらに授けた。
快楽は、虫けらに与えられ、
神の前に立つのは、智天使だ。

Chor
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
35 Such' ihn überm Sternenzelt,
Über Sternen muß er wohnen.

合唱
ひざまずくか、きみたちは、百千万の人々よ。
創造主を予感するか、世界よ。
星空の上に、神を求めよ、
星々の上に、神は住み給うに違いないのだ。

Freude heißt die starke Feder
In der ewigen Natur.
Freude, Freude treibt die Räder
40 In der großen Weltenuhr.
Blumen lockt sie aus den Keimen,
Sonne aus dem Firmament,
Sphären rollt sie in den Räumen,
Die des Sehers Rohr nicht kennt.

喜びは、久遠の自然の
強いばねだ。
喜びが、巨大な宇宙時計の
歯車を回し、
花々をつぼみの中から、
星々を大空の中からいざない出し、
天球を、観測者の筒の見知らぬ空間で
回転させているのだ。

Chor
45 Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

合唱
星々が天空の壮麗な平原を
飛翔してゆくごとく、朗らかに、
兄弟たちよ、きみたちの道を進め、
喜び勇んで勝利に向かう英雄のごとく。

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
50 Lächelt sie den Forscher an;
Zu der Tugend steilem Hügel
Leitet sie des Dulders Bahn.
Auf des Glaubens Sonnenberge
Sieht man ihre Fahnen wehn,
55 Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

真理の炎の鏡の中から
喜びは探究者にほほえみかける。
美德のけわしい丘の上へ
喜びは忍耐者の道を通く。
信仰の光かがやく山頂には
喜びの旗がひるがえり、
打ち砕かれた棺の裂け目からは、
喜びが、天使たちの合唱の中に立つの見える。

Chor
Duldet mutig, Millionen!
Duldet für die bess're Welt!
Droben überm Sternenzelt
60 Wird ein großer Gott belohnen.

合唱
勇気をふるって耐え忍べ、百千万の人々よ!
よりよい世界のために耐え忍べ!
あの星空のかなたで
偉大な神が報い給うのだ。

Göttern kann man nicht vergelten,
Schön ist's, ihnen gleich zu sein.
Gram und Armut soll sich melden,
Mit den Frohen sich erfreuen.
65 Groll und Rache sei vergessen,
Unserrm Todfeind sei verziehn;
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

神々に人は報いることはできぬが、
神々に等しくあることはすばらしい。
悲しい人も貧しい人も名乗り出て、
喜ぶ人と喜びを共にせよ。
恨みと復讐は水に流そう、
われらの不倶戴天の敵を許そう。
涙が彼の胸をふさぎ、
悔恨が彼の心をさいなむことのないように。

Chor
Unser Schuldbuch sei vernichtet!
70 Ausgesöhnt die ganze Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

合唱
われらの黒表は破棄しよう!
全世界は和解せよ!
兄弟たちよ—あの星空の上で、
われらが裁くごとくに、神は裁き給うのだ。

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube goldnem Blut
75 Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut—
Brüder, fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
80 Dieses Glas dem guten Geist!

喜びは、ワイングラスの中に泡立ち、
ぶどうの黄金の血と共に
蛮人は柔和を、
絶望は英雄的勇気を飲む—
兄弟たちよ、並々と注いだグラスがめぐり来れば、
きみたちの席から飛び立ちて、
泡を天に向かって飛び散らせ、
グラスをあつた善い霊に向かって上げよ!

Chor
Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist
Überm Sternenzelt dort oben!

合唱
星々の渦巻きがたたえ、
熾天使の賛歌がほめたたえる、
あの星空のかなたの
善い霊に、グラスを上げよ!

Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschwornen Eiden,
Wahrheit gegen Freund und Feind,
Männerstolz vor Königsthronen—
90 Brüder, gält es Gut und Blut—
Dem Verdienste seine Kronen,
Untergang der Lügenbrut!

重い悩みには不拔の勇気を、
罪なくして泣くところには救いを、
固い誓いには永遠を、
友と敵には真実を、
玉座の前では男子の誇りを—
兄弟たちよ、たとえ財産と生命に関わろうとも—
いさおしには栄冠を、
いつわりのやからには没落を!

Chor
Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
Schwört bei diesem goldnen Wein,
95 Dem Gelübde treu zu sein,
Schwört es bei dem Stermenrichter!

合唱
この神聖な輪をより固く結び、
この黄金のワインにかけて、
誓約に忠実なることを誓え、
あの星空の審判者にかけて誓え!

みんなで歌おう、春日井賛歌を……

< 歓喜の歌 >

作詞 ● なかにし礼

1、あ い こ そ か ん き に み ち
 び く ひ ー か り さ え ぎ る
 く な ん を こ え て す す ー ま
 ん か ん き の い た ー だ き
 ふ み ー し め た と き わ ー れ
 ら は き ょ う だ ー い せ か い は ひ ー と
 つ か ん き の い た ー だ き ふ み ー
 し め た と き わ ー れ ら は き ょ う
 だ ー い せ か い は ひ ー と つ

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
 さえぎる苦難を越えて進まん
 歓喜の頂いただき踏みしめた時
 我らは兄弟世界は一つ
 歓喜の頂いただき踏みしめた時
 我らは兄弟世界は一つ

2. 気け高たかき乙女を勝ち得たものよ
 手を取りかんこ歓呼の叫びをあげよ
 人間一人で何が出来よう
 愛なき孤独の人は立ち去れ
 人間一人で何が出来よう
 愛なき孤独の人は立ち去れ